

書 評

中野真備. 『海を「見る」技術—インドネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈と環境認識』京都大学学術出版会, 2025年, ix + 224 p.

加藤久美子*

たとえば、見知らぬ土地で地図やスマートフォンもなく、円滑に目的地へたどり着くことのできる人はいないだろう。現代の便利さの中にあっても、目印だらけの街中でもなお、ひとは迷い、目的地にたどり着けないことがある。その土地を知らない人間に、その空間は「視えない」。人が目的地にたどり着くために「視て」いるものは、何か。一見なんの目印もない海の上で、漁師たちは何を「視て」いるのか。著者である中野は、本書でサマ人漁師たちの視線の先に視えているもの、その空間を捉えようと試みる。

本書は、インドネシア東部バンガイ諸島のサマ人の漁撈活動を対象とした認識人類学的実証研究の成果である。著者が2022年に京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科へ提出した博士論文「インドネシア・バンガイ諸島サマ人の漁撈における環境認識」と数本の既発表論文、その後の追加調査の成果を併せてまとめた研究書であり、全5章の本文前後に序論とあとがきが加わる構成となっている。これらの研究は、予備調査を含め2016年から2024年まで断続的に行なわ

れた現地調査を基にしている。漁撈活動に関わる認識人類学、民俗分類研究は、生物と背景環境を分けて分析対象とすることも多いが、中野は、生物・自然物・空間の名称や分類を包括的に分析し、バンガイ・サマ人漁師たちの環境・空間認識を多角的に明らかにしようとしている。

本書が対象とするサマ人（他称：バジョ／バジャウ）は、東南アジア島嶼部の広域に拡散居住し、漁撈や海上交易を生業とする海民集団の一派である。陸上に集落を形成せず、舟上生活を送るものも多かったことから、海のノマドとしても知られており、古くから人類学的研究の対象となっている。近年のサマ人研究は、その移動性の高さを集団の特徴として捉え彼等の起源や歴史的形成の過程を明らかにしようとするもの〔Pallesen 1985; Gaynor 2016〕や、拡散居住によって地域的少数派であることの多いサマ人の社会的政治的な戦略を指摘するもの〔青山 2006; 長津 2004, 2012〕まで幅広く行なわれている。しかし、本書の序章でも指摘されているように、サマ人の漁撈活動や環境認識に関する実証的研究は不足している。また、海をめぐる民族分類の研究としても、陸という可視性の強い定点を使用できない外洋域における漁撈活動に纏わる環境・地理空間情報の蓄積・認識を、明らかにした研究は少ない（p. 15）。さらにサマ人の居住・漁撈活動環境に言及する研究の多くは、いずれもサンゴ礁で漁撈を営むサマ人を対象とするため、砂泥質の海岸とマングローブ林の広がる汽水域に隣接したバンガイ・サマ人を対象とした本研究は、サ

* 上智大学アジア文化研究所

マ人の生活環境の多様性を実証的に示す貴重な事例でもある。

第1章では、調査対象地となったバンガイ諸島タミレ村の自然環境、地理的条件、歴史、民族分布・言語状況等概要が示される。同地域は2000年に大地震とそれに伴う津波の被害を受けており、著者が現地調査を開始した2016年にもまだ色濃く震災の爪痕が残る状況であった。この震災以降、沖合から沿岸へ多くの世帯が移住した。それ以前の移住、バンガイ諸島の「半ノマダ的なサマ人」の出自は不明であり、周辺の王国と結びつけられた口頭伝承等から推測されるに留まる。しかしこうした移住は、彼等の居住空間、生活環境の変遷、漁撈活動の変化をもたらす重要な契機となる。

第2章の冒頭では、サマの漁撈活動を歌う歌詞の一節に挙げられる漁法が「網 (*ringgi*)」か「針 (*pissi*)」か揃わないという事例が示され、この揺らぎから彼等の漁撈活動の変遷を感じることができる。中野によれば、網はサンゴ礁で優位な漁法だが、現在タミレ村の周辺にはサンゴ礁が少なく、現在は針を使った釣り漁が主な漁法となっている（祖父母の世代は網漁が一般的だったという記憶もある）ため、漁法に関する想起の揺らぎが発生するのである。こうした漁法の変遷に触れつつ、第2章では、フィールド調査の手法が簡潔に示され、詳細な漁撈活動が記述されていく。初めに漁撈活動及び海上集落での日常生活に欠かせない漁船、さまざまな漁法の詳細が図式と共に緻密に描写される。サマ人漁師は、多様な海洋生物を対象とした

漁撈活動を行なうため、漁船や漁法の種類もさまざまである。サマ人漁師らが、特定の漁法や漁獲に拘って継続・継承を行なわない傾向にあることが、この多様な漁撈活動の記録から示される。彼等の多様な漁撈活動の変遷は、自然環境の変化だけでなく、商業思考の強いサマ人漁師の特徴によってもたらされる (p. 65)。次に、漁師たちが認識する季節区分、1日の区分、漁撈活動を基盤として認識される海洋空間の時節的な揺らぎが示される。サマ人漁師たちは、これら全ての時間・季節・月齢・潮汐の区分を総合的に判断し、適漁期を見極めている。この時節的な認識は、漁場へのナビゲーションと同様に、海を視る視点として重要な知識のひとつである。2章の最後には、本書の主な分析対象となるナビゲーションの技術、知識をヤマアテ／ヤマタテ、スター・ナビゲーション、ナチュラル・ナビゲーションの3種に区分し、紹介する。こうした知識と技術は、時と場合により複合的に用いられることが多い。タミレ村においてはこの3種の技術が総合的に発達し、使用される。タミレ村のサマ人漁師らが漁撈活動を行なう空間は、比較的目標物の多い景観、「見える」空間にあるため、このような総合的発達が見られたと中野は分析する。

第3章では、タミレ村のサマ人漁師たちが実際にどのような手法を用いて海を視ているのか、彼等の視ている海洋空間を、具体的な地形と漁場、目標物の位置関係を図形から示した。この聞き取りにおいて、漁師たちが可視性の高い村、トゥコー（離れ岩）などの

目標物を実際の距離よりもより近く認識していること、また、局所的な目標物や不可視的な漁場を認識し、想像上の「目標物」との位置関係に自己を定位することが明らかにされた。またサマ人漁師の直線距離認知が伸縮することからもわかるように、彼等は上から見渡す「面」としての認識だけでなく、目標物との線状に位置関係を認識する「線的」認知、海中（海底）にある目標物や生物分布、底質、深さ等、さらに天体等を手掛かりとする認識など、環境から得られる立体的な情報を元に海洋空間と自分の位置関係を認識する。また中野はサマ人漁師たちの認識が漁場に近づくにつれてより詳細に認識・記憶していることに着目し、彼等の海洋空間認識の特徴として、漁場を中心とした「波紋」的認識構造があると指摘した。

第4章では、具体的な目標物や海洋生物の名称を民俗分類として整理し、分析している。非サマ人に共有されないモノに関して、サマ語名称が優位的に共有されているという指摘は、サマ人漁師たちの情報共有に言語的な分断が発生しうる事例として非常に興味深い（p. 195）。また、岬や湾の名称についての関心度が低く、海上や漁場に関連する岩等の目標物に関しては詳細に見分け、命名しているという指摘からは、サマ人漁師たちの空間認識の特徴として、遠方と認識されがちな陸への関心度の低さ、それに対する海洋空間への関心度の高さが明らかになった。

結論である第5章では、これまで明らかにしてきたサマ人漁師たちの視覚的な知識を総括し、そこに立ち現れる海の道の不可視性

について議論を深めている。つまり、実のところ、サマ人漁師たちは視る技術だけで海を認識しているわけではない。彼等は、その環境の風や海底や櫂、船底に海が触れる音を聴き、釣り糸の感触を触り、その場所を知るのである。また中野は、近年の技術革新によって新たな漁場が発見されるなど、道具や機械がもたらす空間認識の変化にも言及し、自然環境と人間存在の関係性としての空間認識や環境認識学が展開していく可能性を示した。

このように、本書はサマ人漁師たちの外洋域における漁撈活動に関わる名称や分類を広く収集し、包括的に分析することで、これまでのサマ人研究、海域研究の不足を補い、彼等の海洋空間認識を明らかにすることを目指した。そして緻密な実証的研究により、これまでの民族分類学が看過してきたトゥコー（離れ岩）のような単体で意味をもちにくい対象、単独で無秩序に認識されているように思われた自然物に関する、ナビゲーション技術における実用的な認知と名付けの事例を詳細に描き出した。

しかし、漁撈活動に従事しているサマ人漁師を対象とし、また調査内容も漁撈活動に関わる実証的な項目に限定した（pp. 56-57）ことで、より具体的で綿密な実証的研究となった一方、漁撈活動に直接的に関係のないと判断された歴史的な記憶や抽象的な世界観が看過されている印象を受けた。たとえば、*mbo* というサマ語の（年上、祖先（霊）に対する）敬称と個人名によって発見者の名前を記憶する目標物が多数存在するが、漁撈従事者たちへの聞き取りでは、その人物が實在

の人物か、存命か、架空の存在かなどについて詳細は明らかにされない (pp. 181–189). また、故事に由来する命名がされたといわれる目標物（禁忌という強い忌避的名称をもつ）に関しても詳細は不明のままである (p. 189). 結語にも言及されるように、認識や感覚の「不可視性」, 「揺らぎ」の側面、不明瞭な定まらない動態は、サマ人社会、サマ人の生き方の特徴とも重なる興味深い着眼点となるだろう。著者による丁寧な聞き取りと地理的データ技術を駆使した調査を併せた複眼的研究が継続され、今後、より深いサマ人の海の世界をみせてもらえることを期待している。

引 用 文 献

- 青山和佳. 2006. 『貧困の民族誌—フィリピン・ダバオ市のサマの生活』東京大学出版会.
- Gaynor, Jennifer L. 2016. *Intertidal History in Island Southeast Asia: Submerged Genealogy and the Legacy of Coastal Capture*. New York: Cornell University Press.
- 長津一史. 2004. 「『正しい』宗教をめぐるポリテイクス—マレーシア・サバ州、海サマ人社会における公的イスラームの経験」『文化人類学』69: 45–69.
- . 2012. 「『海民』の生成過程—インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として（〈特集〉跨境コミュニティにおけるアイデンティティの持続と再編）」『白山人類学』15: 45–71.
- Pallesen, Kemp A. 1985. *Culture Contact and Language Convergence*. Manila: Linguistic Society of the Philippines.

佐藤千鶴子編. 『移民の社会的保護—南アフリカ・モザンビーク・マラウイの制度と実態』アジア経済研究所, 2024 年, v + 187 p.

原 将也 *

本書は、2022～2023 年度にアジア経済研究所で実施された共同研究会「南部アフリカにおける国境を越える人びとの社会的保護」の最終成果をまとめた論集である。南部アフリカ地域における国際移民に焦点をあて、彼らの社会的保護をめぐる制度と実践の双方をあつかう。社会的保護 (social protection) という言葉は、日本語ではなじみの薄い言葉であるが、極めて包括的な概念であり、社会保障や社会福祉のみではなく、雇用やヘルスケア、教育、住宅、貧困削減のための政策や制度を含む。移民研究の文脈では、移民自身が行使するさまざまな戦略や非公式な制度も含まれるという。本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章：国境を越えて移動する人びとの社会的保護—序論—（佐藤千鶴子）
- 第2章：南部アフリカにおける国際人口移動—歴史—（佐藤千鶴子）
- 第3章：南アフリカの国際移民政策と社会的保護政策の連関（牧野久美子）
- 第4章：移民労働者の社会的保護とグローバル企業—モザンビーク人鉱山労働者の職業性疾患—（網中昭世）

* 神戸大学大学院人間発達環境学研究科